

渡辺章悟著『金剛般若経の研究』

兵 藤 一 夫

本書は、著者が長年にわたって積み重ねてきた般若経研究の中、『金剛般若経』を中心にまとめて学位請求論文として提出したものを基にしたものである。その内容の中心は、著者自身のことばを借りれば、『金剛般若経』の成立から発展へという流れを考察したものである。後に紹介するように、『金剛般若経』における重要な用語であるプラジュニヤー（般若）、ヴァジュラ（金剛）、金剛喩定等、を再度詳細に検討することにより、般若経の経典史の中での本経の位置づけを明確にしようとする。また、それに加えて、翻訳の途中段階のままに残されたとされる笈多訳『金剛能断般若経』の解説を通して笈多が底本とした梵本への還元を試みることによる新たな文献研究の可能性を示すこと、チベット語訳『金剛般若経』の諸版を比較研究することを通して本経の置かれた特別な状況を明らかにすることなど、従来の『金剛般若経』や般若経の研究に対して新たに加えるに十分な成果を有している。

0. 本書の全容

本書は五編からなっているが、目次によって本書の構成を示せば次のようである。

第1編 金剛般若経の形成史的研究

第1章 書誌学的研究

第2章 般若経の成立史

第3章 般若経の系統と分類

第4章 金剛般若経の重層性

第5章 『金剛般若経』第18節にみる拡大般若の影響

第6章 『金剛般若経』成立の根拠とされる色身・法身の偈頌

第2編 金剛般若経の發展的研究

第1章 プラジュニヤー (Prāñā) 再考

第2章 般若波羅蜜多 (Prajñā-paramitā) の解釈

第3章 悟りへの一瞬の智慧

第4章 ヴァジュラ (vairocana) とは何か

第5章 金剛般若経のタイトルについて

第6章 金剛喻定 (Vairocana-samadhi) の考察

第7章 大乘仏教の成立と法滅思想

第3編 笈多訳『金剛能断般若経』の研究

第1章 笈多の生涯と訳経活動

第2章 経録における笈多の翻訳

第3章 大正蔵経の笈多訳と『金剛能断般若波羅蜜経』

第4章 『金剛般若論』・『金剛般若波羅蜜経論』に引用される『金剛般若経』

第5章 笈多の翻訳方法

第4編 チベット・敦煌出土の『金剛般若経』写本の研究

第1章 チベット大蔵経カンギュルの研究状況

第2章 チベット語訳『金剛般若経』の諸版

第3章 タイトルの相違

第4章 チベット語訳『金剛般若経』シエルカル写本

第5章 『金剛般若経』に付された真言と祈願文

附編

・ INDEX to the *Vajracchedikā Prajñāpāramitā*

・ 金剛般若経漢七訳対照

このように、本書は多岐にわたる内容をもったものであるので、すべてを取り上げるとは筆者の能力を超えると共に紙数の制限もあるため、ここでは筆者の関心のままに、本書の論点の幾つかを紹介するに止めておきたい。特に、第三、四編については簡単な紹介に止める。

第1編 金剛般若経の形成史的研究

ここ二、三十年の間に新たな写本の発見等もあり、仏教研究は大きく展開している。中でも、大乘經典の研究は、大乘仏教の興起に関する新たな見解等の提示や議論と相俟って大きく変化をしているように思われる。そういった状況を承けて、著者は近代の般若経研究（特に『金剛般若経』）の歴史に関して略説している。

それによれば、これまでの般若経の研究は、テキスト校訂や翻訳、經典群の展開史や分類、さらには思想史的問題

など、あらゆる面にわたってコンゼ (E. Conze) の研究成果に依存することがほとんどであったが、近年それを見直すことがなされ始めている。その一例を挙げれば、シヨペン (G. Schopen) による『金剛般若経』の校訂テキストの出版（一九八九）である。それはコンゼ校訂本を「コンゼ教授によって設定されたテキスト」として批判的に捉え、それを含めて既存の刊行テキストを再検討し、ギルギット写本を正確に読み直して詳細な注と英訳を付したものである。また、大乘仏教の興起に関しては、律文献や碑文などの資料に基づいた新たな見解が出され、さらに最近アファニスタンを中心に次々と写本が発見されている中に般若経などの初期の大乘經典類が含まれていることなどもあり、新たな研究の機運がいつそう高まっている、としている。

第2章 般若経の成立史・著者は、従来の研究成果を批判的に踏まえた上で、幾つかの新たな視点を提示している。『異部宗輪論』によれば、制多山部（東山部）等の大衆部系の南方の三部は、菩薩は悪趣を離れている、仏塔に供養しても大果は得られないなどの見解を持ち、初期大乘仏教の中では異例である「仏塔崇拜に批判的である般若経」の特色と共通しているが、このことは仏塔崇拜を行っていた部派の中の革新的グループによって般若経が生まれたという可能性を示している、とする。

また、『中論』のバーヴィヴェエカ（Viveka）の注釈『般若灯論』に対するアヴァローキタヴラタ（Avakīṭavratā）の『般若灯論注』の中に、大乘非仏説論に対する反論として、大衆部の東山部・西山部の阿含から『十地経』や般若経の特質が生じ、彼らはプラークリットの「般若経」を誦読していると述べていることを紹介し、南方の大衆部系統の部派の教理が般若経成立の準備としての役割を果たしたことを指摘している。本書は、般若経がインド南部で生まれ北に広まったこと、大衆部系の教義と関連していること等、これまで指摘されていることではあるが、それをより具体的な論拠を基に示している。

第3章 般若経の系統と分類・般若経は約一千年にわたって増広、縮小、派生を繰り返した膨大な文献群であるが、

その展開をおおざっぱに見ると、(i)原始般若經典の形成(紀元前1000年～紀元後1000年)、(ii)經典の増広期(紀元後1000年～3000年)、(iii)教説の個別化と韻文化の時期(3000年～5000年)、(iv)密教化の時期(5000/6000年～2000年)とされる。その中で著者は、『金剛般若經』は『善勇猛般若經』や『文殊般若經』などと並んで(iii)の段階のものであるとする。

従来の研究(中村元、静谷正雄など)では、『金剛般若經』は、「空」や「大乘」等の語が見られないこと、經典の形式が極めて簡素で古形を示しているなどを根拠に、般若經の系統の中で最も古いとされてきたが、著者はその見解を否定して次のように示す。「空」は大乗特有の概念ではなく大乘を量る基準にはならず、「空」や「大乘」という語を用いないでその思想を説く般若經は珍しくないこと、説法の会座が王舎城靈鷲山ではなく『文殊般若經』などと同じく舍衛國祇園であること、『金剛般若經』の「信解の劣った人々」という語句は新しい段階の『八千頌』や『二万五千頌』の梵本やチベット語訳には見られるが、対応する古い漢訳には見られないため大乘との対立意識が明確になった後に付加された語句であると考えられること、幾つかの教説は小品系(『二万五千頌』)の影響を受けていること、鳩摩羅什(四〇二年)以前には翻訳されていないこと、無著の注釈より古い注釈はないこと、バーヴィヴェーカ以前の現存の著作の中に引用がないこと、等により、『金剛般若經』の成立は三〇〇～三五〇年前後の頃であろうとするが、ほぼ妥当な見解であろうと思われる。

第4章 金剛般若經の重層性・著者は『金剛般若經』の規範となるコンゼ本(C本)と漢訳・チベット語訳、ギルギット写本(G本)、東トルキスタン写本(P本)等を比較すると、そこには大きな違いがあり、『金剛般若經』の重層性が認められることを指摘する。そのことを、著者は三つの観点、(i)否定句の形式化、(ii)他者への働きかけ、(iii)法滅(後の五〇〇年間に正法が滅すること)の定型化、から検討を行っている。(i)に関しては、G本では一般的な仏教教理の論述が、C本では即非の形式に変更されたり整えられたりし、G本では即非の論理だけであるのに対し、C本ではデ

イレンマ(……でもなく、……でないでもない)の句が追加されたりしている。(ii)に関しては、G本では特に言及がないのに対し、C本では「他の人々のために」教えを説くことが追加される。(iii)法滅に関しては、G本では法滅の言及がなかったり曖昧であるのに対し、C本ではきちんと「五〇〇年間に正法が滅ぶとき」と表現されていることを指摘する。これによって、従来の漢訳との比較だけではなく、現存の中で最も古い形態であるG本と比較することで、『金剛般若経』が増広されてきたことが明らかにされる。

さらに著者は、本経が途中(第13節aの末尾)に、スプーティがこの法門の名を尋ね世尊がそれに答えるやりとりが見られること、それ以降はそれまでの内容を繰り返したり詳説したりする形になっていくことにより、成立を異にする二つ(第13節aまでと13節b以下)の部分が結びつけられてきたことを示唆しており、内容上も構造上も断層があるのが現存の『金剛般若経』であるとする。

第5章 拡大般若の影響・著者は『金剛般若経』(第18節)が直接に拡大般若経(特に小品系)の影響を受けていることを三つの点から論証しているが、ここでは「五眼(肉眼・天眼・慧眼・法眼・仏眼)」に関する議論を取り上げておく。

五眼は般若経の中では重要な教説とされる。『二万五千頌』(小品系)の注釈である『現観莊嚴論』によると、般若経(特に小品系)は十種の教説を説示するものとされ、その一つが五眼に対する教説である。ハリバドラの注釈によれば、五眼は順に、それぞれ個々の事物・すべての有情の死と生・無分別・聖者の証得するもの・一切相として現等覚するものを対境とするが、真如としては同一であると学ぶことであるとされる。

著者は、この五眼説が小品系に受容されるのは羅什訳の『小品般若経』以降であり、これはむしろ小品系の思想と言えらる。このことは『現観莊嚴論』の立場からしても言えることであり、五眼の説を有する『金剛般若経』の成立を小品系般若経以降であることは妥当なように思われる。

第6章 色身・法身の偈頌・『金剛般若経』には三つの偈頌が含まれている。最初の二つは、色身と法身に関して述べ

られたもので、羅什訳などの古いものには初めの色身のもの一つだけしかない。著者はこの二つの偈について、初期の仏典、『金剛般若経』の注釈、この偈を引用するその他の諸文献を比較検討することによって、次のように推測する。最初は一偈であった『金剛般若経』が、第二偈を備えるようになったのは羅什(四〇二年)訳から流支(五〇九年)訳の間であり、五世紀頃であろう。また、第一偈のみを備えたものは羅什訳の50年ほど前だとすれば、先に述べたように、三〇〇年〜三五〇年頃の成立ということになる。

第2編 金剛般若経の發展的研究

著者は、第二編において、『金剛般若経』の題名に含まれる「般若」「般若波羅蜜多」「金剛」「金剛喩定」などの語を個別に検討し、それぞれの意味を考察して、題名の意味を明らかにしようとする。

第1章 プラジュニヤー再考・ウパニシャッドから仏教へと辿る形でその語義を考察する。般若とは、ウパニシャッドではアートマンと同一視される根源的な智慧であり、それによって天界へと跳び出し不死へと至る。仏教では覺りの智慧であり、それによつて煩惱を斷じ涅槃に至るから、両者は表現としてよく対応する。しかし、獲得する結果は異なっている。ウパニシャッドでは天界での欲望の享受と不死であるが、仏教では煩惱(欲望)を斷じた涅槃であるからであるとする。ただ、ここでの論述は「般若」の語義やその変遷についての根拠の提示が限られているので、十分に説得的なものになっていないことは残念である。

第2章 般若波羅蜜多の解釈・般若波羅蜜多(特にPrajñāpāramitā波羅蜜多)に関しては、これまで幾つかの研究があるが、著者はこれまで余り注目されなかつた大品系の般若経の中に見られる語義解釈を丹念に比較検討することによって、般若経自身がどのように語義解釈しているかを明らかにしている。当該の語義解釈が見られるのは『二万五千頌』

(梵本、漢訳・放光・羅什訳・玄奘訳第二会、チベット語訳・経部・論部)と『二万八千頌』(梵本、漢訳・玄奘訳第三会、チベ

ット訳」とであり、そこにはそれぞれ四種の語義解釈がなされているが、著者はそれらの異同を検討することを通して、その四種の語義解釈を次のようにまとめる。

(i) paramitā を parama-parami-*[prāpta]* (あらゆるものの中の) 最高の完全性 (を実現した) とするもので、これが語義解釈として最も妥当なものである。

(ii) 聖者たちがこの般若波羅蜜によつて彼岸 (悟りの領域) に到った (*parāṅgata*) ということで、これが歴史的に最も多く取られていた教理的解釈である。

(iii) 「限界 (*pāra*) が」 認知されない (*anupalabha*) 智」あるいは「すべてのものが勝義として」不可分 (*abhinna*) であることを明らかに覚る」 仏智という逆説的機能。

(iv) 「真如などを」 包摂する (*antaragata*) という論理的・空間的広がりを持ったものである。これらの中で、(i)における「最高の完全性を実現した (*parama-parami-prāpta*) 」という表現は、著者も指摘するよう、F. Edgerton の辞書によれば、*parami-prāpta* や *paramitā-prāpta* とも書写され、多くの大乘経典 (『法華経』、『大無量寿経』、『維摩経』、『月灯三昧経』など) に頻出する。その場合、対告衆としての比丘の特質を表現するものもあるが、主に如来の功徳を表現するものとして用いられている。般若経自身が波羅蜜多 (*paramitā*) という語をこれらの特質と結びつけて解釈していることには經典の作成や増広に携わった者たち自身が波羅蜜多という語に込めた意味が示唆されているであろう。このようなことが今まで看過されてきたことに驚くとともに、今回の著者の指摘によりその重要さに気づかされる。

これに関連して、著者も一部言及しているように、ハリバドラの『現觀莊嚴論釈光明』には波羅蜜多を「彼岸に到った」と解釈しているが、彼岸を「完全々の究極 (*praktasaparyanta*) 」と言い換えているので、上記の (i) を踏まえたものであるとも言えるであろう。また、ハリバドラは、語義解釈に続けて、デイゲナーガの『般若経の要義

『Pratipatnamitipindartha』の「般若波羅蜜は不二の智であり、それは如来であり成就すべきものである。また、それ（般若波羅蜜）を目的とすることと結合することによって、典籍と道はその名を持つものである。」（第一偈）を用いて、仏・世尊であり、幻の如き不二の智が真の般若波羅蜜であつて、それ（般若波羅蜜）の獲得に随順する典籍と道は仮なる般若波羅蜜であるとして、三種に分けてゐる。

第3章 悟りへの一瞬の智慧…著者は、般若経の成仏觀の一つの特徴として、『八千頌』において無上の悟りを現等覺するのに長い時間が必要であることを恐れないようにとスプーティイに対して世尊が語ることは、「先立つ過去の知られざる発端、つまり、果てなきものは、心の一瞬間とむすびついている」の中、「心の一瞬間（一刹那）」という語に注目する。そして、これが『二万五千頌』では頓悟の智慧を意味する「一刹那に相応した般若」という表現へと展開していくが、この頓悟の智慧ということの起源は、『異部宗輪論』における大衆部等に見られる如来の智慧の特性「如来は一心刹那と相応する般若によつて一切法を遍知する」等に起源するものであると指摘する。

『二万五千頌』では「一刹那に相応した般若」は六回現れるのみであるが、修行道の最終局面で重要な機能を果たしてゐるとして、その用例を検討している。それによれば、「一刹那に相応した般若」によつて「一切相智者性」「一切の習氣と結合した煩惱の断滅」「無上正等菩提」が得られること、すなわち、前者と後者は因と果の関係になつてゐることが示される。また、決定位に入り、その後、金剛喻定に入つて「一刹那に相応した般若」によつて「一切相智」を得るとも言われ、「一刹那に相応した般若」と「金剛喻定」が結びつけられることもある。したがつて、この「一刹那に相応した般若」は菩薩摩訶薩と如来正等覺者を区別する境界ともなり、この一刹那の有無が両者を分けてゐるのである。

このような著者の論旨は概ね首肯できるものであるが、「菩薩と如来は、一切の様態を知り、一切の様相を知る智慧を得て、一切の習慣的な煩惱を断じ去るといふ意味では何ら変わりはない。ただ如来は、一念（刹那）相応の般若

によって、一切の法を知って、無上なる正等正覚を得ている、この違いがあるのみである。この相違は預流などの聖者の位に向道と得果があるようなものである。両者は聖なる存在という意味では何ら変わりはない。菩薩は無礙の道中にあり、如来は解脱の道中であって、すべての闇を除去しているのである」(p.13)というまとめの言は、それまでの論旨と「第五節まとめ」の内容とを併せて考える時、誤解を招く恐れがあるかも知れない。

ところで、この「一刹那に相応した般若」は『現觀莊嚴論』で云う「一刹那現等覺」に相当するように思われる。

(ただし、『現觀莊嚴論』自身はそのようには呼んでいない。)周知のように、『現觀莊嚴論』は般若経(特に『二万五千頌』)を發心から仏地(法身の獲得)に至るまでの一貫した修行道として捉えて解釈するもので、順に、学習対象として(1)一切相智者性(2)道智者性(3)一切智者性、加行として(4)一切相現等覺(5)次第現觀(6)頂現觀(7)一刹那現等覺、果として(8)法身となつている。これは、いわゆる、論書の構成の基本型である教(学習対象)・行(実践)・果(証)を踏まえて、教と行をさらに細かく区分したものとなっている。そして、行の最終段階の果を得る直前に特別な一刹那の段階を設定しているのである。

第4章 ヴァジュラ (vajra 金剛) とは何か・著者は、先行研究に基づきながら、ヴァジュラの用例を『リグヴェーダ』におけるインドラ神の手にする武器に辿り、インドラ神が「ヴァジュラを持つ者 (vajraṃ)、ヴァジュラを手(腕)とする者 (vajraṃ vaitrabhū) 」と呼ばれることを紹介した後、その形状は千鈹の放射型であり、素材は仙人の骨や金属など堅固で輝きのあるもので、電撃や雷鳴を発する「金剛杵」でもあると述べる。

一方、ヴァジュラが金剛石(ダイヤモンド)を意味するようにもなるが、パーリ仏典の用例としては両方に跨がり、インドラ神の武器(電撃)やそれを具象化した金剛杵が一般的であるが、金剛石(ダイヤモンド)と捉えた方がよい文脈もあるとする。また、カウティリヤの編纂した『実利論』(前3世紀頃)では、ヴァジュラは貴金属として、ヴァジュラ・摩尼・真珠・サンゴなどとまとめた形で述べられており、鉞物として採掘され、価格が決められて裝飾品など

として市場で売られていたことが記されていることから、当時、世間的には金剛石の意味も有していたことが知られるとする。

第5章 金剛般若経のタイトル…ヴァジュラをタイトルに持つ経典は、本経 (*Vajracchedikā Prañāpāramitā*、【能断】金剛般若経)が最初であろう。その中で、最初に漢訳されたのが、鳩摩羅什訳であり、以後、菩提流支訳、真諦訳、笈多訳、玄奘訳、義浄訳と続く。これらの中で、最初に「能断」を付したのは達磨笈多である。ただ実際には笈多訳はサンسكريットの語順に従って「金剛能断」としている。続いて、玄奘と義浄とともに「能断金剛…」と翻訳することが指摘される。

般若経は一般に偈頌(三十二音節)に相当する音節数や初品の内容が題名とされる中で、能断金剛という題名を有するものは特異であり、もし題名がその経典の理念を表わすとすればその意味の解明は本経の内容を解明することにつながるとして、著者は検討を開始する。

先に述べたように、本経は第13節で一旦終わる形になって法門名が明かされるが、その場合、梵本とチベット語訳では「般若波羅蜜多」とだけ呼ばれ、金剛の語はない。漢訳では笈多訳と真諦訳以外は当該部は「金剛」の語を有しているが、これは漢訳者の操作の結果生じたものである。この個所以外には「金剛」の語は本経には出てこないため、経典自身から経名を検討することは困難であるので、他の般若経を含めた全体の中で *vajracchedikā* の語義を検討し、その意味を承けて本経(経名)が成立したと考えることが妥当であろうと著者は述べる。そのために、『大般若経』(初会〜第十六会)のすべてにわたって著者は「金剛」「金剛喻」「金剛喻定」などの語の用例を調査分析するのである。

それによれば、玄奘訳『大般若経』の十六会全体で「金剛」は二二八件、「金剛喻」は八三件、「金剛喻定」は二〇件などとなっており、その中、大品系(初会〜第三会)はそれぞれ一四四件、七八件、一六件であり、小品系(第四、五会)は六件、〇件、〇件である。(それ以外で目立つのは、第六会(勝天王般若)は「金剛」が一八件、第十会(理趣

分)は四八件でこれらはいずれも金剛手・金剛拳などの菩薩名である。)さらに、「金剛」の語の多くは「金剛喩」の意味で用いられており、それらを含めて「金剛喩」の語もその大半は「金剛喩定」などの三昧に関連するものとなっている。それらのことから、著者は、これらの語は主に「金剛喩定」と関連する内容を持ったもので、大品系において金剛喩定に関する思想体系が発展したことが推測できるとする。

以上のことを踏まえて、著者は、大品系の「金剛」という語の意味を検討した結果、金剛石の意味で使用される例は極めて稀であって、金剛とは「インドラ神の」武器(金剛杵)であり、破壊力を象徴しており、具体的には一切の煩惱の習気を摧断する金剛喩定における智慧の強力な破壊力を意味しているとす。さらに、*cheika* という語は粉碎・切断の機能や威力を表していることを考え合わせると、〈煩惱を断滅する。金剛に喩えられる三昧〉の智慧の経典ということとなると述べる。

確かに、般若経の文脈では大半が「金剛」(金剛喩定における「金剛」も含む)は金剛石(ダイヤモンド)ではなく武器であるとするのが妥当であるとしても、著者自身も紹介するように(PT12)、大品系の「菩薩摩訶薩の金剛の如き発心(金剛喩心)」の金剛は金剛石であり、また後に(金剛喩定の考察)の箇所)著者が引用する『大毘婆沙論』における金剛喩定の解釈(P190)「金剛喩定が現前するとき、煩惱は頓断する。その定が一切の惑を断ずるからである。そのため金剛喩定と名づけるのである。それは金剛が能く、鉄・石・牙・骨・貝・玉・末尼等を破するようなものである」は、文脈からして金剛石が意趣されているように筆者には思われる。(ただ、著者が同じ章で引用する『俱舍論』の用例は金剛杵と金剛石のどちらにも解釈できるが、『智度論』の用例は「インドラが手に金剛を執る」と述べているので金剛杵であろうと思われる。)したがって、大品系の般若経においても幾つかは重要な箇所では「金剛」が金剛石の意味で用いられているし、有部などでは、金剛喩定の金剛も、それが破壊力を象徴しているとしても、金剛石を念頭に置いた表現として捉えられていたのではないかと思われる。

第6章 金剛喩定の考察…続いて、著者は般若経における「金剛喩定」を考察することにより、般若経の菩薩道の特質を明らかにしようとする。先ず、パーリ仏典に見られる「金剛に喩えられる心を持った人」は、金剛が他の宝石をよく摧断するように、漏を滅尽して心解脱と慧解脱を現証した聖者であることを提示し、次いで先行研究に基づきながら「金剛喩定」がアビダルマ文献（有部では旧訳の『婆沙論』で最初に明記される）において修行道の最後に位置付けられることを紹介し、具体的に『大毘婆沙論』や『俱舍論』の解説を提示する。さらに、小品系の般若経では、古い漢訳（道行）『大明度』には「金剛喩定」の言及はなく、羅什訳の『小品』以降にそれが見られることから、初期の形態では金剛喩定の伝統は確立していないことを示す。

以上のことを踏まえながら、著者は、般若経は小品系の成立の時代にアビダルマの修道体系（見道から修道に至り、阿羅漢向から阿羅漢果を得る直前に金剛喩定に入り、すべての煩惱を断じて阿羅漢となり尽智・無生智が生ずる）を受容して新たな菩薩道、すなわち、「菩薩の決定位」を得た者が、さらに修習の後、「金剛喩定」に入り「一刹那に相応する般若」によって一切の煩惱の習氣を摧断して、「仏果（法身、一切相智者性）」を得る、という菩薩道を再編するに至ったと述べるのである。そして、著者は、この菩薩道はアビダルマの修行道の「行の階梯」が「智の変化」に改編されたとも述べるが、筆者には著者の意趣を十分に理解することができない。アビダルマにおける修行道は、例えば有部では、見所断の煩惱を断ずることによって見道に入り、修道において修所断の煩惱をどれだけ断ずるかによって一向・果、不還向・果、阿羅漢向・果に分けられて、それが「行の階梯」として表現されるが、煩惱を断ずるのはすべて四諦を現観する智慧であるから、「行の階梯」というのも内実は「智の獲得」であり、それは「智の変化」でもあるので、その意味では表現の違いにすぎないように思われる。また、有部などのアビダルマと小品系の般若経の修行道の階梯の類似性は明らかに認められるが、両者のいずれが先で、他に影響を及ぼしたかについてはもう少し慎重な考察が必要であるようにも思われる。『婆沙論』と小品系般若経の両者の成立の前後は明らかでなく、逆の可能性も

否定できず、また両者が俱に影響を受けた第三のソースさえも想定し得るからである。

第7章 大乘仏教の成立と法滅思想…著者の云う法滅思想とは、仏陀の入滅後、いずれ正法が衰退し、やがて滅んでしまふというもので、大乘經典に「如来滅後五〇〇年に正法が滅しようとする時」などという形（著者はこれを法滅句と呼ぶ）でしばしば説かれるものである。著者は、この法滅思想は、(i)阿含には見られない、(ii)大乘經典になつて定型化される、(iii)これまでの研究で大乘仏教の興起は仏滅後およそ五〇〇年である、という三つのことに基ついて、大乘仏教が起つてくると密接に関連するであろうと想定し、『金剛般若経』を直接の資料としてそれを論証しようとする。その際、『金剛般若経』に基ついて法滅句を四つの構成要素、(a)将来・最後の世・最後の時代(b)最後の五百年間に(c)正しい教えが滅びつつあるとき(d)これらの經典がこのように説かれたとき、すぐれた菩薩摩訶薩たちが現われ、それが真実であるという想いを起す、に分けて検討を行なつてゐる。

『金剛般若経』には法滅句が四カ所見られるが、著者はそれらを諸本において比較対照して検討し、それを次にように結論する。初期の『金剛般若経』に説かれる法滅句は、「未来世において、この經典が流布することを仏陀が保証する」という文脈であつたが、それが「(a)将来、最後の世、最後の時代に、(b)最後の五百年間に、(c)正しい教えが滅びつつある時、(d)徳を備え、戒律を保ち、智慧のすぐれた菩薩摩訶薩たちが現われ、これらの經典のことがばがこのように説かれるとき真実という想いを起すであらう。」などと(a)～(d)までを備えた完全な定型句となつていく。

著者は、このように法滅句が加筆・修正されたのは、法滅の意識の高まりに應じて大乘の意義も高まるという構造の中で、「最後の五百年」という語句を指定し、「正しい教えが滅びつつある」という危機意識を強調することで、今こそ大乘という正法が流通する時節であることを示そうとするためであつて、これらの語句を後代の直線的歴史観である正・像・末法観と結びつけるのは妥当でない。そして、本来の法滅句の文脈は、伝統的な正法が滅しつつある「今」こそが、新たな正法（大乘）が起る時である（法滅＝法興）という初期大乘側の積極的な見解とするに留める

べきであるとする新たな注目すべき見解を述べる。

第3編 笈多訳『金剛能断般若経』の研究

本編については、笈多訳研究の意義について著者の言に沿って紹介するに止める。『金剛般若経』には七種の漢訳が残されているが、「達磨」笈多訳は他の漢訳に比して大きな相違がある。著者は、笈多訳は未完の翻訳がそのまま残されたものであり、極めて特殊なものであるが、その特殊であることが逆に『金剛般若経』の原典研究のための重要な資料となると認め、その観点から笈多訳の研究を始めるのである。

笈多訳の『金剛能断般若経』は修文する機会がなかった未完の翻訳である。中国の訳経場には、(i)訳主、(ii)証義、(iii)証文、(iv)書字梵字、(v)筆受、(vi)綴文、(vii)参訳、(viii)刊定、(ix)潤文官(役人)の九の役職があつたとされる。その中、(v)筆受とは「梵音を翻じて華言と成す。…」と、(vi)綴文とは「文字を回して綴り、句義を成さしむ。…」とされている、すなわち、前者は梵語を単語ごとに漢語に翻訳し、これを後者は漢語の文章に綴っていくというところで、分業体制による翻訳である。著者は、現存の笈多訳をこの体制に当てはめて、「筆受」が終了し、最終段階に近い「綴文」の直前のものであるとする。

著者は、このような笈多訳を現存の梵本と他の漢訳諸本を参照しながら分析して、笈多訳の訳出法に一定の翻訳の規則があることを見出し、その訳出法を基準にして、逆に漢訳から梵語へ還すこと(還梵)を行なっている。本書には、判明した笈多訳の翻訳規則が列挙され、それに基づいて還梵されたテキストが記されている。詳しくは言及しないが、一つのユニークであるが重要な研究の成果となっている。

第4編 チベット・敦煌出土の『金剛般若経』写本の研究

『金剛般若経』はチベットにおいても重要な経典として翻訳され、写本を通して流布しているが、著者はそれらの中で現存するものを広く調査し、体系的にまとめている。今後の『金剛般若経』研究の基礎資料としても大いに役立つものである。(第1章〜4章)

また、漢訳やチベット語訳の『金剛般若経』には経典の末尾に真言(陀羅尼)や祈願文などが付せられているが、従来の研究では見落とされがちであったものである。著者は、それらは本経の持つ特性として重要であるとして取り上げて比較検討している。真言や祈願文は『金剛般若経』がどのように流布し、受容されたかを示す資料としても重要な意味があり、今後の経典研究の方向の一つを示しているであろう。

附編

附編は、『金剛般若経』のサンスクリット原文とチベット語訳に対する二種類の索引と、七漢訳の対照テキストである。

平成21年2月20日刊、山喜房佛書林、B5版

xxiv + 五六七頁

ISBN978-4-7963-0185-5